



桃は種人は命を深く抱き	栗原 公子
図書室は木箱のごとし蟬しぐれ	広渡 敬雄
金曜の残業帰り桃を買ふ	福島 茂
新涼やさはりて和紙のうらおもて	大沢美智子
ふるさとの水を称へて新豆腐	内山 花葉
豊年や大河ゆつたり海に入る	林 昭太郎
補陀落へ船の影ひく良夜かな	菊地 光子
ゆふぐれを夜へ引き込む烏瓜	辻 美奈子
鶴髪の紛れてたのし芒原	千田 百里
近づき来る津軽三味の音星月夜	藤原 照子
露白しひたすらに行く夢に覚め	大畑 善昭
秋の初風枝切り狭ひびきけり	吉田 政江
盛り上がりくる秋海の力かな	田所 節子
炎昼を裂くトランペットの咆哮	村上 葉子
太陽の雫のやうに咲くカンナ	小倉 征子
高潮に克つが郷土史鹽の町	森村 江風
鍵穴めく古墳の眠り星流る	兵藤 恵
満月の川の差し潮野生めく	広海あぐり
草の市雨ともいへぬ雨の中	井原 美鳥
さやけしや楷書のごとき佇まひ	菅原 健一
海と川いのち往き交ふ秋の水	七田 文子
繡仏のぬばたまの髪秋に入る	平松うさぎ
人の世に極りありけり天の川	平城 静代
涼しさや和綴ちの本に白き糸	栗坪 和子
稲の香のどつと乗り込む無人駅	道端 齊
つれづれに夕日へ凭る案山子かな	澤田 英紀
柔道の技一瞬や稲の花	熊谷 成子
稲の花米一升は四万六千粒	水谷 昭代
白芙蓉完了形で日々を生く	金光 浩彰
ひとり仕事増やして夫の瓢棚	関 妙子

沖 の 水 脈

